

<書評> スティーヴ・フリートウッド著(佐々木憲介・西部忠・原伸子訳) 『ハイエクのポリティカル・エコノミー：秩序の社会経済学』

SUZUKI, Hidenori / 鈴木, 英規

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

75

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

401

(終了ページ / End Page)

408

(発行年 / Year)

2007-07-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003117>

【書評】

スティーヴ・フリートウッド著 (佐々木憲介・西部忠・原伸子訳)
『ハイエクのポリティカル・エコノミー:秩序の社会経済学』
法政大学出版局, 2006年

鈴木英規

はじめに

スティーヴ・フリートウッドは、いつも気がつけば人の輪の中心にいるような存在である。その開けっ広げな性格から、たとえ初対面であっても、彼自身のユニークな経歴から研究活動まで、根掘り葉掘り尋ねてみたくなる。聞いてみれば、自転車レーサーから研究者への転身など、なるほど「運命」としか言いようのない力に導かれる人生を辿っている。その中でも不思議な「めぐりあわせ」は、「マルクス主義経済学者・社会理論家を自認しながら、ハイエクの本を書くことになった」ことであろう。¹⁾ それには「成り行き」という偶然も作用したらしい。²⁾ しかし、フリートウッドによれ

1) オーストリア経済学とマルクス主義経済学は、共に「異端的(heterodox)」ではあっても、「主観・客観主義的」価値論や方法論の違いから、一般的に「水と油の関係」と見なされる。またハイエク自身、マルクス主義経済学の「設計主義」を批判している。

2) フリートウッドは、ケンブリッジ大学経済学部へ提出する博士論文の課題として、当初は①均衡主義者と②ハイエクと③マルクスを、それらの哲学・方法論において比較考察するという計画を立てていた。しかし、指導教官のトニー・ローソンから、「それでは広くて浅い研究に終わりがかねない」と忠告され、そのうちの一つにテーマを絞ることにした。研究を進めるうちに、自らが均衡主義に批判的であることがわかり、まず①を諦める。その後②と③の研究を並行させ、先に完成したハイエク秩序論を博士論文として提出し、それが後に本書へと結実する。しかし、フリートウッドにとっては、③の研究こそがライフワークであり、現在も継続的に従事している。

ば、マルキシストがハイエクを研究することに意義があるようだ。よって小論では、マルキシストの研究として『ハイエクのポリティカル・エコノミー』（以下『ハイエク』と省略）を紹介しようと思う。この限られた誌面では、議論の骨格に多少の肉付けをすることしか適わないが、それでもフリートウッドの思想の全貌を見渡ししながら、その中における『ハイエク』の意味を考える。まず、本書が中心的なテーマとして議論するクリティカル・リアリズムを考察する。³⁾ 次に、ハイエク秩序論における理論化様式の切り替えに注目する。⁴⁾ 更に、マルクス価値論を社会経済秩序の変換理論として考察し、ハイエク秩序論との同型性・相互補完性を見出す。

1. クリティカル・リアリズム

クリティカル・リアリズムは、経験論的実在論（empirical realism）から超越論的実在論（transcendental realism）への、還元主義的な存在論（reductionist ontology）から変換的な存在論（transformational ontology）への、切り替えを訴える。

-
- 3) クリティカル・リアリズムは、社会科学の研究領域で展開する哲学・方法論上の一視座で、フリートウッドはその発展に中心的な役割を担っている。この視座は「認識論」よりも「存在論」を重視する点に特徴がある。「認識論」とは、ものごとに関する知識や、知識を得る方法への問いかけであるのに対して、「存在論」は、ものごとそのものの性質への問いかけである。この視座は両者を区分し、「世界や現実」を、「世界や現実についてわれわれが知っていること」に矮小化しない。つまり、われわれが知っている以上に存在すること、われわれがすでに認識している世界観や現実像以上の世界や現実が存在することを尊重する。以下は日本語の参考文献：トニー・ローソン（2001）「現代経済学再考の必要性について：形式主義的モデル化からリアリスト社会理論の構成へ」『経済セミナー』8月号、原伸子訳・解説；－（2003 [1997]）『経済学と実在』江頭進・葛城政明訳、東京、日本評論社；西部忠（1996）「レトリックとリアリズム：方法の復権」『批評空間』II-10；佐々木憲介（2000）「批判的実在論の射程」『資本主義の原理：新しいパラダイムを求めて』星野富一・奥山忠信・石橋貞男編、京都、昭和堂；鈴木英規（2006）「通約不可能性」で「計算論争」を再考する：クリティカル・リアリズムによるノイラート評価』『季刊経済理論』43（1）。
- 4) ここまでが『ハイエク』の内容である。「二つの存在論」については第6章を、ハイエクの「理論化様式の切り替え」については第8章を参照。尚、マルクスについては、「日本語版への序文」で、ハイエク市場論の基本的アプローチを継承しながら、マルクス主義的な労働市場論を展開するという、自身の研究プロジェクトを紹介している。

1.1 多層的な存在論 (layered [stratified] ontology)

➤ 経験論的实在論: 「経験的領域」と「現実的領域」の2層からなる「平板な存在論 (flat ontology)」を前提に、理論化によって「予測すること (prediction)」を目指す立場 (図1 参照)。世界や現実、われわれが見聞きしたり、観察したりして知ることのできる世界や現実にすぎない。例えば「すべてのカラスは黒い」という一般的な主張から「次に見るカラスも黒いだろう」という特殊な主張を推論したり、「今までに多くの黒いカラスを見た」という特殊な観察から「すべてのカラスは黒い」という一般的な主張を引き出すように、「表層」の諸現象間を「水平移動」することで世界や現実を把握する。「出来事Aが生じれば、必ず出来事Bが生じる」という表現形式によって、世界を「閉鎖」してしまう。

図1：多層的な存在論：『ハイエク』137頁参照

領域 (Domain)	存在 (Entity)
経験的 (Empirical)	経験 (Experience) 知覚的 (Perception) 印象 (Impression)
現実的 (Actual)	事象 (Events) 行為 (Actions)
深層 (Deep)	構造 (Structures) メカニズム (Mechanisms) ルール (Rules) 力 (Powers) 傾向 (Tendencies) 関係 (Relations)

「経験論的实在論」は異なる層の構成要素を一対一対応させ、世界・現実を、例えば、個々の経験によって与えられる個々の事象とする。「超越論的实在論」は、「表層領域」に還元不可能な「深層領域」を理由に、必ずしも異なる層の構成要素が対応するとは限らないとする。

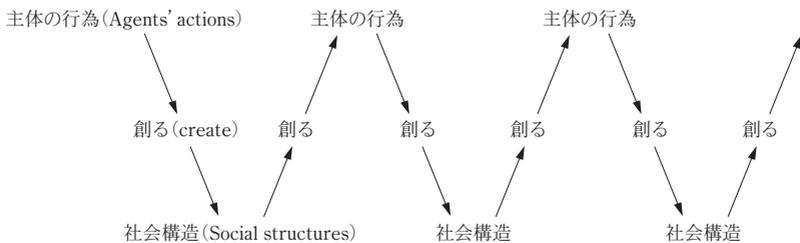
➤ 超越論的实在論：上記の2層に「深層領域」を加えた3層の「多層的な存在論」を前提に、理論化によって「説明すること (explanation)」を目指す立場 (図1 参照)。世界や現実、直接的に知ることはできなくても、われわれが経験したり、実際に起こったりする出来事の背後にある、構造・メカニズム・ルール・力・傾向・関係などによって支配されてい

る。例えば「多くの黒いカラスを見た」という特殊な観察から「カラスを黒くする内在的なメカニズム」を究明するように、「表層」の現象から「深層」にある原因へ「垂直移動」することで世界や現実を把握する。「ある条件が満たされた場合、出来事Aが生じれば、出来事Bが生じる」という表現形式によって、世界が「開放」される。

1.2変換的な存在論

- 物象化（Reificationist）の立場：社会構造が主体の行為から独立して存在する、という考え方。人間を社会へ還元してしまう。主体の行為を、世間の荒波に翻弄された結果としか見なすことができず、その創造性を尊重できない。
- 主意主義（Voluntarist）の立場：社会構造は主体の行為の結果である、という考え方。社会を人間へ還元してしまう。主体の行為が社会的制約を受けることに留意できないし、社会があることでむしろ可能となるような行為を認められない。

図2：変換的な存在論



- 弁証法的（Dialectical）な立場：主体の行為が社会構造を創り、そして創られた新たな社会構造が新たな主体の行為を創り、そして更にまた…という、相互的因果性の考え方（図2参照）。社会構造は人間が活動することで生じるのだし、何らかの社会構造を前提に、人間の意図的・意識的な行為が可能となる。人間主体と社会構造は相互に前提としあう存在であり、一方を他方に還元しない。

2. ハイエク

ハイエクは理論化様式を「均衡の原理」から「秩序の原理」に基づくものへ切り替える。⁵⁾ それによって、自身が前提とする存在論が「平板なもの」から「多層的なものへ」、「還元主義的なもの」から「変換的なもの」へ切り替わる。⁶⁾

➤均衡の原理：均衡とは、生じることになっているすべての出来事がすべて生じきった状態であり、「最終状態 (an end state)」である。均衡理論の関心事は、実際に生じた事象・行為が、時間的・空間的に調整されることである。経済学の課題は、実際に生じた出来事を観察して、次に何が生じるか予測することであり、「表層領域」の中で「水平移動」することである。

➤秩序の原理：秩序とは、メカニズムや構造といった既存の条件と、そうした社会構造を再創造・再生産し、絶えず変換する人間活動とが織り成す、終わりのない「プロセス (a process)」である。秩序理論の関心事は、実際に生じた事象・行為よりも、それらが生じるのを可能にしたメカニズムや構造などの条件である。経済学の課題は、そうした条件がどんなものなのか説明することであり、「深層領域」へ「垂直移動」を試みることである。

ハイエクは「均衡の原理」ではなく「秩序の原理」に基づく理論化様式によって、社会経済を「知識という形態の資源 (resources in the form of knowledge)」「ふるまいの社会的ルール (social rules of conduct)」「情報伝

5) フリートウッドは、秩序の原理に基づく理論化様式を「社会的活動の変換モデル (Transformational Model of Social Activity)」と呼ぶ。

6) 『ハイエク』は、ハイエクの理論化様式の切り替えと、思考の背景にある哲学・方法論的な立場の変遷が、単発ではなく、段階的に継続して生じたことを解明する点に特徴的である：1936年以前の「実証主義者」だった「ハイエクI」；1936年から1960年までの「主観的観念論者の認識論」と「経験論的実在論者の存在論」を併用していた「ハイエクII」；クリティカル・リアリズムの立場をとりつつあった「ハイエクIII」。

達システム（telecom system）」の集合体として捉える。

- 知識という形態の資源：対象との継続的な相互作用を基礎に、先行する知識から生まれる社会的な（再）生産物のこと。そうした知識の発見・伝達・貯蔵を容易にし、調和のとれた社会経済活動を可能にするのが、市場プロセスである。知識とは変換的であり、その多くが「暗黙知（明確に言い表せないが身につけているノウハウのような知識）」のように「深層的」である。
- ふるまいの社会的ルール：他者の行為を考慮しながら自分の行為を決定するときに依拠する、伝統・慣習・習慣のような一般的ガイドラインのこと。法律のような、熟慮をもって創造・維持される「設計主義的なルール」や、契約の履行のような、正式に記録される「公式的なルール」と異なり、暗黙的に知られ、無意識に遵守される「非公式的なルール」である。
- 情報伝達システム：コンピューター・計算機械としてではなく、コミュニケーションや通信の手段としての「価格メカニズム」のことで、相互に離れている他人同士が、商品や価格の情報を伝達し合い、相互に行動を調整するのに役立つ。例えば経済新聞やビジネス雑誌のような「公式的メカニズム」とともに、経済・商業に関する知識の利用可能性を大きくする。

これらを「表層領域」から切り離し「深層領域」の事柄として捉えることで、人間が規則的な行動をとるための条件を把握しながら、結果として生じる事象・行為は必ずしも規則的でない、ということを説明できるようになる。

3. マルクス

フリーウッドによれば、マルクス労働価値説に第一義的なテーマとは、例えば「価格論」の関心で「搾取」を証明することではなく、なぜ、如何

にして、労働という生産活動を通して人間関係が「社会関係」へと変換するのか説明することである。マルクス価値論は、以下のように「多層的で変換的な存在論」を前提とする。

- 経験的領域：労働活動を調整するために、人間関係が物（商品）の関係として現れる。人間同士の社会関係が、商品同士の物の関係という、物神化した形態（fetishized form）で現れる。
- 現実的領域：現行の資本主義体制において、実際に、人間関係が物（商品）の関係という形態で現れる。なぜならそれが、労働活動を調整する唯一の方法だから。
- 深層領域：労働活動を調整する生産関係という「実体（substance）」が、人が物の関係で現れるという「様相（appearance）」を支配する。つまり、人間関係が物の関係になるという事象の原因が、労働活動を調整する生産関係という「深層構造」にある。

労働という生産活動には、物質技術的（material-technical）な側面と、社会経済的（socio-economic）な側面があり、それらは変換的なプロセスである。

- 物質技術的なプロセス：労働とは、物事を、当初の状態からより便利な状態へと変換させることである。それには、原材料と機械類が時間・空間的に調整される必要がある。
- 社会経済的なプロセス：原材料と機械類が時間・空間的に調整されるには、それまでばらばらだった個々の生産者が社会経済的な関係性を持ち、生産活動を調整する必要がある。

マルクスの問い掛けで最も重要なものは、「なぜ、如何にして、労働が商品形態となって現れるのか」と「それにはどんな関係が、その条件としてあるのか」であり、それらの解答として、価値・商品・貨幣形態論のような「表層的」議論と、それらを背後から支配する物質技術的・社会経済的な関係性を説明する「深層的」議論がある。更に、労働という生産活動を調整するために、より質の高い多くの知識と情報が必要となる。まさにこ

こが、マルクス価値論とハイエク秩序論の接点である。個々の生産者が、ハイエクの指摘する市場プロセスを通して、他の生産者の条件を知るようになる。個々の商品が体现する抽象的な人間労働が、「情報伝達システム」という価格メカニズムを通して、社会的に必要な労働として認識されるようになる。

おわりに

マルキシストがハイエクを研究する意義とは、理論化様式の切り替えに伴って両者が前提とする「多層的で変換的な存在論」に開眼することである。例えば、われわれの人生を想起すれば、それは「運命」のような予測不可能で潜在的な力に導かれるものだし、いつでもその途上であって、個人が社会との関わりの中で意図的・意識的に行動し、期待通りの結果が得られるとは限らないが、ある目標達成が更なる目標達成への足がかりとなる。『ハイエク』は、そうした人間存在が織り成す社会経済を、ありのままに捉える術のつまった「工具箱」のような一冊である。

参考文献

Fleetwood, S. (1997) 'Critical Realism: Marx and Hayek' in 1997 Willem Keizer, Bert Tieben and Rudy van Zijp (eds) , *Austrian Economics in Debate*, London: Routledge.